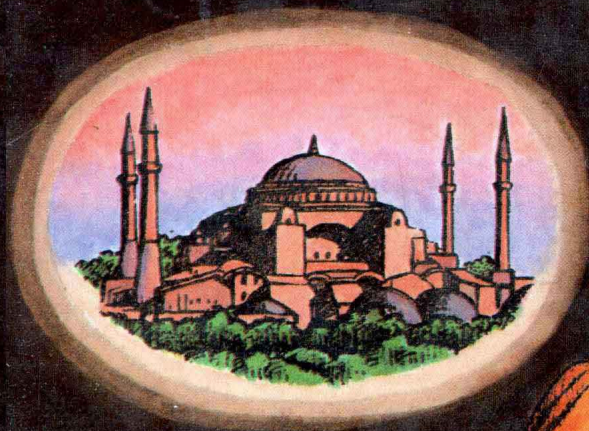


ПРОКЛЕТА АВЛИЈА

呪われた中庭

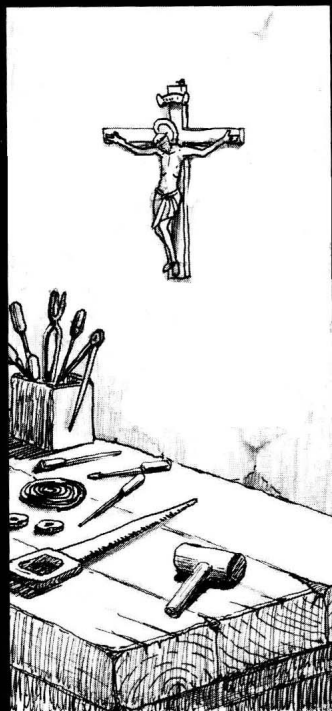
イヴォ・アンドリッチ／栗原成郎訳



呪われた中庭

イヴォ・アンドリッチ

栗原成郎訳



恒文社

〈訳者略歴〉

栗原成郎 (くりはら・しげお)

- 1934年 東京に生まれる
1958年 東京教育大学文学部 (言語学) 卒業
1961年 同大学院修士課程修了
1964年 カリフォルニア大学 (パークレイ校)
スラヴ語スラヴ文学科修士課程修了
1966年 東京大学教養学部専任講師
現在 東京大学文学部助教授 (ロシア語ロ
シア文学講座)
著 書 『スラヴ吸血鬼伝説考』 (河出書房新
社) 他
訳 書 「ボリス・ゴドゥノフ」 (河出書
房新社『ブーキシン全集』) 他



©1983
KÔBUNSHA

呪われた中庭

定価一八〇〇円

一九八三年九月三〇日 第一版第一刷発行

著者 イヴォ・アンドリッチ

訳者 栗原成郎

発行者 池田恒雄

発行所 株式会社 恒文社

東京都千代田区神田錦町三十三
電話 〇三(二九一)七九〇一
振替 東京五一三五八二四

印刷・製本／大日本印刷

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN 4-7704-0532-4 C1097

呪われた中庭 * 目次

呪われた中庭 5

胴体 125

サムサラの旅籠屋の茶番劇 145

さかずき 175

水車小屋のなか 189

囲い者マール 199

オルヤツイ村 295

解説——栗原成郎 311

イヴォ・アンドリツチ略年譜 323

訳者あとがき 327

呪われた中庭

装幀・雨宮 一正

呪われた中庭

冬だ。雪がすべてを埋めつくし、家の戸口のところにまで吹き溜まりをつくっていた。雪は万象からその本来の形象を奪い、そのかわり同一の色彩と同一の形状を与えた。あの小さな墓地もこの白一色の世界のなかに消えているが、背の高い墓標の十字架が深い積雪のなかから、いくつかその頭だけをのぞかせている。ほかに見えるものといえば、処女雪のうえにまだその跡をとどめている細い小道しかない。それは、きのう、修道士フラ・ペタルの埋葬のさい雪間を踏み分けてつけられた道だ。そのつきるあたり、小道は広がって、いびつな円形をなしている。そのところの雪は、湿った粘土質の土にまじって赤茶けているので、遠くからは、白地の一点を血に染めた、なまなましい傷のように見える。白銀の雪原は無限のかなたへと延び広がり、重く雪をはらんだ灰色の荒涼とした空に連なって、それと見分けがつかなくなっている。

フラ・ペタルの住んでいた僧房の窓からは、この銀世界が一望のもとに収められる。ここでは、外の世界の白さと、僧房の内部に君臨しているものうげな影とが融合し、あたりの静寂は、フラ・ペタルの手もとに集められたいろいろな時計が——そのなかにはとまってしまったものもあるが——静かに時を刻む音とうまく呼吸を合わせている。そのしじまを破るものは、隣の空き部屋でフラ・ペタルの遺品目録をつくりながら言い争う、二人の修道士の低い話し声だけだ。

年寄りの修道士ミヨ・ヨシツチはなにかわけのわからないことを口のなかでぶつぶつ言ってい

る。彼のつぶやきは、生前のフラ・ペタルとよくやった口論の余波なのだ。フラ・ペタルは「時計修理・武器修理・器械修理の名人」と呼ばれた男で、修道院の金をつぎこんではありとあらゆる工作道具を熱心に買い集め、しかも、それらをけっして他人の手にさわらせようとはしなかった。そういうわけで若い修道士ラスチスラヴが、寒い部屋で凍えながらの目録づくりなんかまっぴらだからベチカに火をつけよう、と言いつつと、老師はやにわに大声で若輩をどなりつけた。「なんだ、若い者が情けない！ おまえたち若い者ときたら、どいつもこいつも閨房のトルコ娘みたいに寒がりばかりだ。暖かい部屋がいいだと！ この冬は、暖房の薪も金も足らんとでも言いたいのか！」

そこまで言って、老僧は、その遺体のうえにまだ土をかけたばかりの故人を非難しているような気がしたらしく、ふと口をつぐんだが、すぐまた言葉をついで、若い修道士を罵りつづけた。

「わしがいつも言うようにだな、おまえなんかラスチスラヴなんてもんじゃなくて、ラスピスラヴ（『むだ金使い』）だ！ おまえの名前はなあ、ろくでもない名前だ。修道院の兄弟たちが兄弟マルコ、兄弟ミヨ、兄弟イヴォと呼び合っていたあのころはいい時代だったが、この節おまえさんたちときたら、どこの小説から拾ってきた名前だか知らないが、やれ兄弟ラスチスラヴだ、やれ兄弟ヴォイスラヴだ、やれ兄弟ブラニミルだなどと名乗っておる。妙な世の中になったものだ」

若い修道士は、手を振ってこの老人の勘繰りと悪態を聞き捨てにする仕草をした。こういったことはもう耳にたこができるほど聞かされてきたし、このさきどれほど聞かされるかわかったも

のではなかった。仕事はつづけられていた。

つい二日前まではここにいて、自分たちと同じように生きていた人の遺品の目録づくりをする二人の男たちは、一種独特な様相を呈している。彼らは、傍若無人に自分の欲しいものを手に入る勝利者の生き方の代表者だ。だが、勝利者と呼ぶにはおそまつすぎる。しいてその功を挙げらば、それは彼らが故人よりも長生きであるというにすぎない。だから、こうして傍目から見れば、彼らはいくぶん盗賊めいて見えるわけだ。とはいうものの、この盗賊たちときたら、無罪の身であることが保証されているうえに、いまさら宝のほんとうの持ち主がまい戻ってくるわけがなく、現場を押さえられる心配もないことを先刻ご承知だ。この二人、もちろんそういう怪しげな者ではないのだが、なんとなくそんなふうに見えてしかたがない。

「つぎを書いて」——老修道士のあらっぽい声が聞こえる——「さあ、書いて。大型ペンチ、クレシエヴォ製、一挺」

こういう調子で、あらゆる道具がつぎからつぎへと記帳され、記入がすむと、ガチャンと鈍い音を立てて、フラ・ペタルの愛用したかしの木の小さな工作机のうえに乱雑に山積みされていく。こうした二人の作業を見たり、その物音を聞いたりしていると、人は知らず知らずのうちにその心の想いを生から死へ——いまこうして他人のものを数え、集めている人々から、すべてのものを失い、存在しないが故にもはやなにものをも必要としなくなった人へ——移行させていく。

つい三日前までは、クッションも敷ぶとんとれて板がむき出しになったあの大きな寝台のうえに、フラ・ペタルが身を横たえ、ときには坐ったりなどして話を聞かせたものだった。そしていま、雪に埋まったその墓を眺めながら、青年はフラ・ペタルの話しぶりを思い起こしていた。彼は、ペタルが話し上手であったことを言い出したい衝動に何度かかられたが、それを言うことはできなかった。

死ぬ直前の数週間、フラ・ペタルは彼のイスタンブール滞在の話をすることが多かった。それは、何年も昔の話だった。ボスニアのある修道院は、こみいった面倒な事態処理のために、前修道院会計係、前修道院長たるフラ・タジャ・オストイッチ（「この人はやたらとへ前」の字が付く人だった）をイスタンブールに派遣した。オストイッチは、悠然とした威厳のある人前で、自分でもその時世おくれと高潔さに惚れこんでいた。

彼はトルコ語を話すことができた（それもゆつたりと威厳をもってである）が、読み書きはできなかった。そのため、トルコ語の読み書きが自由なフラ・ペタルが同行することになった。

二人は、一年たらずイスタンブールに滞在するうちに持ち金をのこらず使いはたし、借金までしたが、肝心な仕事はなにひとつ片づかなかった。そういうことになったのは、フラ・ペタルの身に突然ふりかかったある不運な出来事のためだった。それは複雑にからみ合った事態の混同から起こったことで、トルコ官憲が罪人と無実の者との区別を見失った混乱期のことだったのだ。

彼らがイスタンブールに到着して間もないころ、イスタンブール駐在のオーストリアのインテルヌンキオ（教皇大使代理）宛に送られた書簡が、途中でトルコ官憲によって押収されるとい

事件があった。その書簡は、アルバニアにおける教会の情勢、聖職者および信徒に加えられた迫害にかんする一般報告書だった。書簡を携えていた者はうまく逃げおおせた。そこで、当時他国からイスタンブールに入った修道僧はほかにいなかったの、トルコ警察は勝手な理屈をつけてフラ・ペタルを逮捕した。二カ月のあいだ、フラ・ペタルは「審理中」の名のもとに拘禁されたが、この間、しかるべき訊問はなにひとつ受けることがなかった。

イスタンブールの拘留所ですごしたこの二カ月間のことになる、フラ・ペタルはほかのどんな話のときよりも一段と熱がはいり、縷々（ろろ）綿々（めんめん）と語ったものだ。だが、フラ・ペタルの話は重態の病人がその肉体的苦痛と迫りくる死の、そのときどきの予感を相手に気づかれまいとしながら話すのだから、休み休み、とぎれとぎれにならざるを得なかった。そのとぎれとぎれの話は、かならずしも順を追ってはつながらなかった。話をつづけながら、前に言ったことを繰り返し、そうかと思うとずっと先の方へとんで、時間の流れを無視することがよくあった。彼が話すとき、時間は彼にとってもはやたいした意味をもたず、またそれ故に、他人の生活においても時間や時の規則的な流れにはいかなる意義も与えなかった。彼の話は中断し、再開し、継続し、繰り返し、先にとんだかと思うとあとに戻りし、話し終わったあとで補足や説明があり、場所や時間や出来事の実際の経過はまるで無視されてしまう。

そのような話し方だから、当然のことながら脱落や説明のつかない個所が生じてくるのだが、聞き手の青年にしてみれば、説明を求めて話を中断させたり、話をもとに戻させたり、質問したりするのも具合の悪いことであった。なんといっても、人それぞれの持ち味を生かした話し方を

させるのがいちばん良いことにちがいないのだから。

一

レヴァント（地中海東部沿岸地方）の人々と、さまざまな国籍の船乗りたちが「デポシト」（倉庫）と呼んでいるそこは、住民が囚人と獄吏だけのひとつの小さな町になっている。だが、土地の人々やその町に多少とも係わりのある人々のあいだでは、「呪われた中庭」と呼ばれており、むしろこの名のほうがとおっている。ここに来る者、ここをとおって行く者は、すべてみな、毎日この巨大な、人口の多い都会のどこかで逮捕されたり、拘引されてきたりした犯罪者か容疑者であるが、ここの犯罪の件数たるやまことにおびただしく、その種類も多種多様であるし、一方、容疑には限度というものが無い。それは、イスタンブールの警察が、犯人を追ってイスタンブールの陋巷（ろうきやう）を搜索するよりは、「呪われた中庭」から無罪と判明した者を釈放することのほうが容易である、という捜査原則を金科玉条としていたからだ。ここで大がかりな逮捕者の分類が緩慢に行なわれる。裁判のために審問を受ける者あり、ここで短期の刑に服す者あり、あるいは無罪放免となる者あり、遠隔の流刑地に送り出される者あり、といった具合だ。またここは、警察が必要とあらば、いつでも偽の証人、「おとり」、騒ぎ屋などを選び出すことのできる溜め池でもある。こうして「中庭」は、その住民である雑多な人間集団をたえずふるいにかけ、いつも満員で、人の出入りが絶えないのだ。

ここには、店先からぶどう一房、いちじく一個をかすめた小僧っ子から、世界を股にかけた大詐欺師、極悪非道の強盜にいたるまで、重罪微罪さまざまな犯罪者がいる。無罪の者、濡れ衣を着せられた者、低能の者、人生の落伍者、間違つてしよっぱかれた者もここに在る。彼らの出身地もイスタンブールをはじめ全国津々浦々におよぶ。しかし、逮捕された者たちの大部分はイスタンブールの人間で、イスタンブールの波止場や市場をうろろし、町はずれのスラム街を根城としている連中で、人間のくずの見本のような手合いだ。押し込み強盜、掏摸、ばくち打ち、詐欺師、ゆすり、食うためには盗みも騙りもやる貧乏人、酔っぱらい、自分の飲み代を払い忘れる陽気なとら、あるいは飲み屋で器物を破損する者、からんでけんかをする者、酒乱、人生から得られないものを麻薬に求めて、ハシシュに陶然となり、阿片を吸飲し、命の絆である薬物を手に入れるためにはどんな歯止めも効かない、青白く瘦せさらばえた哀れな人々、もはや立ち直ることのできない背徳の老人たちと罪惡に身を滅ぼした若者たち、あらゆる本能と習慣がことごとく倒錯歪曲し、それらをかくそうともごまかそうともせず、かえってしばしばそれらを世間に見せびらかし、またかくそうと思つても、しみついた惡徳が一挙一動に透いて見えるために、かくしきれない變質者たち。

殺人累犯者もいれば、何回も脱獄を重ねた者もあり、そのため彼らは裁判と判決を受ける前にすでに枷をはめられている。彼らは挑発的にその枷をがちやがちや鳴らして鉄を呪い、枷の考案者に激しい呪いの言葉を浴びせるのだ。

「中庭」には、また、トルコ帝国の西部諸州から流罪の宣告を受けた者たちが、一人のこらず送

りこまれてきて、ここで彼らの運命が決せられる。つまり、イスタンブールに有力な手づるがあったり保護者がいてくれたおかげで釈放され、国もとに帰れる者と小アジアやアフリカの流刑地に送り出される者とに分かれるのだ。彼らは、いわゆる「一時滞在者」という連中で、概して年配の者が多く、郷土にあってはそれぞれの宗派や自治体の代表者として人望のある人士であったが、国もとで起こったなにかの暴動、紛争に巻きこまれたあげく、国法に触れて罪に問われ、あるいは敵対者の誹謗にあつて政治犯ないし謀反者の汚名を着せられた人々だ。彼らは、衣類やその他の身の回り品をいっばいにつめこんだトランクやかつぎ袋を持ちこんできているので、同じ監房で寝起きをともにしなければならぬイスタンブールのうさん臭い、油断ならない連中から自分の荷物を護るのにひと苦労だ。不安そうに、ひっそりと、なるべく人から離れたところに彼らは身を置くのだ。

十五棟ほどある平屋、ないし二階建ての建物は、長い年月をかけて建築され、増築されたもので、細長く広い、不規則な形をした急斜面の中庭を囲んで、高い塀が建てめぐらされている。中庭のうち、申し訳程度に舗装がほどこされているのは、警備員詰め所と事務室のある建物の前のところだけで、あとは踏みかためられた灰色のかちかちの地面で、朝から晩まで大ぜいの人間に踏みつけられるため、そこには雑草一本生え出ることができない。中庭のちょうどなかほどに生えている、二、三の貧弱な、貧血症のような樹木は、つねに傷つけられ、皮をはがれ、四季の變化も知らずに殉教者の生を生きている。この起伏のある広い中庭は、昼間は、いろいろな人種や民族の集まる定期市のように見える。だが、夜になると、囚人の群れは十五人、二十人、ある

は三十人ずつを一団として、監房のなかへ追いこまれていく。騒々しい、雑然とした生活は監房のなかにまで持ち越される。静かな夜はめつたにない。

看守を恐れず、およそ人前をはばかりということを知らぬイスタンブールの根っからのならず者どもは、卑猥な歌をうたいまくり、近くの監房にいる稚児ちごさんたちに破廉恥はれんちな誘惑の言葉を呼びかける。闇のなかで姿の見えない男たちが寝場所のことで言い争う。盗難にあった者が助けを呼ぶ。ある者は眠りながら歯ぎしりし、唸り声をあげる。ある者は断末魔のように呻き、苦しげにぜいぜいのどを鳴らす。そのとき、巨大な獄房は、夜のジャングルのように、音だけが生きる世界となる。あるときは、突拍子もない喚声があがったかと思うと、こんどは溜め息が聞こえた。またあるときは、あらゆる官能の欲望の、かなしい、むなしい代償行為なのだろうか、レチタイヴォレチタイヴォ（叙唱）の個所のような、ながながとした歌の二、三節が聞こえ、そうかと思うと、重くるしい、のどの奥から押し出されるような、正体不明の声が聞こえる。

騒音は獄舎の外からも伝わってくる。それは古びた観音開きの大門が、夜のあいだ人々を——一人のときも集団のときも——迎え入れたり送り出したりする開閉のたびに軋み、轟音を立てるからだ。夜のうちに受刑囚は、他の監獄や流刑地に送り出される。また、波止場には付きものの腕力沙汰の果てに、口から泡を吹き、血だらけで、髪はざんばら服はずたずたの風太郎どもが、憤怒とアルコールと殴り合いの興奮さめやらぬままに、連行されてくることもしばしばあるのだ。彼らは罵り合い、脅しつけ、看守の隙をついて、なんとかしてけんか相手にもう一発くらわしてやりたいと身構える。引き離され、別々の監房にほうりこまれても、なおしばらくは憤懣が